

高校生 平和への願い継承

あす長野で戦争体験聞く集い

終戦の日の15日、5人の高校生が戦争体験者の手記を朗読する。戦後80年を迎え、戦争の「語り部」が少なくなる中、若い世代が当事者の言葉をいまに伝え、継承する。

「これ、ちょっと読んでみたいなあ」

7月中旬、朗読に向けシベリアに抑留された同市の故・坂田雪男さんの体験談だ。



終戦の日の集いで「戦争体験」を朗読する左から渡辺美来さん、丸山和奏さん、主催する細川順子さん、中野杏寿紗さん＝長野市

戦後80年

極寒の重労働で仲間が亡くなり、凍った遺体をストーブでとかして埋葬した経験などが記されていた。中野さんは「(凄惨な死に)周りの人たちはどんな気持ちだったのだろうか」と声を上げた。手記を差し出したのは、自分史出版などを営む同市の細川順子さん(73)。戦争体験を書き残そうとする人たちの支援し、形にした手記を語ってもらおう場として、毎年8月15日に「玉音放送と戦争体験を聞く集い」を開いてきた。

しかし、敗戦から80年を経て多くの「語り部」が鬼籍に入ったり、体調が優れなかったりして自ら話せなくなった。その代わりにと、昨年の集い

「重みやつらさ残してくれた」手記 朗読へ

で試行的に取り組んだのが学生たちによる朗読だった。

3年の丸山和奏さんは前回、公募に応じて朗読した。今年は同じ高校の演劇部の仲間と声をかけ、1年生を含む4人で参加することにした。

丸山さんは、曾祖父から身内が戦死したことを聞かされ「戦争と平和への関心はあったという。」「私たちの祖父、祖母の世代も戦争を経験していない。身近に知る環境がない中で、戦争体験の重みやつらさを文字に残してくれた」と感謝する。

もう1人の3年、渡辺美来さんは漫画「はだしのゲン」や映画などで戦争に触れてきたが、学校でその機会は少なかったという。「体験者がつづった言葉を通してもっと詳しく知りたいと思った」

今回の朗読にはもう1人、高校3年の男子生徒から応募があった。今後登録制にして学生朗読ボランティアを募るつもりだ。

シベリア抑留の手記を書いた坂田さんは学校での講演活動などに熱心で

「戦争は二度と起こしてはならない」と訴え、特に若い世代への継承を願っていたという。

細川さんは「体験者の平和への願いが込められたバトンが、若い人たちに受け継がれていくのは尊いことだと思います」。

朗読にとどまらず、坂田さんらが生きた時代や歴史について生徒自ら調べ、発表することも検討しているという。

「戦争悲しむ者生むばかり」

「長野空襲を語る集い」40回目

80年前の8月13日、米軍機が長野市を空襲した。47人が亡くなったと

「長野空襲を語る集い」が40回目を迎えた。世界で戦火がやまない中、体験者たちは改めて「反戦の誓い」を立てていた。



長野飛行場周辺の地図を示しながら体験を語る小野塚健夫さん＝長野市

長野市で開かれた集い(長野空襲を語る集い主催)には約70人が参加。空襲の標的にされた長野飛行場の近くに住んでいた小野塚健夫さん(91)が初めて、公の場で11歳の体験を語った。

朝、姉と縁側で「漫画

15日の集いは午後1時から、長野市のもんせんぶら座3階304で。80代3人の戦争体験談もある。参加費は1人300円(資料代、小中高生は無料)で事前申し込みは不要。ボランティアも含めた問い合わせは「自分史を綴り語り継ぐ会」の細川さん(026・237・9393、携帯090・8774・2110)。

(北沢祐生)

「みたい」と眺めていた米軍機が突然急降下。直後に目前で真っ赤な火柱と黒煙が立ち上った。恐怖から足が震えて動けなくなっていると、母親が「このバカ者」と怒鳴りながら防空壕に引きずり込んだ。

その後に「バリバリ」と機銃掃射の音。静かになったので外に出ると、さっきまで座っていた縁側や軒先の瓦が吹っ飛んでいた。庭や道路には、たくさんのお花が散っていたという。

空襲で学校の友人を亡くし、ずっと封印していた記憶だが、「少しでも戦争反対の役に立てれば」と声を上げた。「戦争に勝者も敗者もなく、犠牲者と悲しむ者を生むばかりだ。絶対にやっつけられない」と力を込めた。

ほかに3人の体験者らと、この戦争の歴史を学んでいる裾花中学校の1年生2人が登壇。「戦争という同じ過ちをくり返さない」「語り継ぐという火を消してはいけない」などと訴えた。

(北沢祐生)